

## (13) お茶の相互交流を

「茶旅」  
”こぼればなし”

コラムニスト 須賀 努



昨年の話になってしまい、誠に恐縮ではあるが、10月初めに東京浅草で、2つのお茶関連の大きなイベントがあった。1つは世界の紅茶を集めた「シングルオリジンティー・フェスティバル」、もう1つは同じ会場ビルの1階下で行われた『地球に優しい中国茶交流会（通称・エコ茶会）』である。この2つは全く違う主催者が、偶然にも同じビルで同じ日に開催したもののだが、そこから今後の茶業へのヒントが垣間見られたので、その一部を紹介したい。

「シングルオリジンティー」とは、生産者が明確で、かつブレンドや着香などの加工を施していない茶葉本来の個性を味わう紅茶を指している。紅茶

はブレンドという概念を持っている消費者も多いが、逆に中国茶の世界では、ブレンドに違和感がある人もいる。当日はインドやスリランカの有名茶園の本場の紅茶をマイカップ持参で試飲することができ、紅茶の基礎知識などの講座も開催され、紅茶の魅力が感じられる作りとなっており、中国茶関係者からも『中国・台湾紅茶との違いを再認識できた』と好評だった。

また参加者の中には、筆者もお会いしたことがある、入間や川根の茶農家さんも出店していた。イングリッシュティーの世界でお茶を飲んでおられる方々にとつて、日本産紅茶は新鮮に映ったのか、沢山の人が試飲し、実際に購入する姿も多く見られた。参加者が

らは『日本の紅茶を初めて飲んだが、違った味わいがあり、インド紅茶との比較ができて楽しかった』などの声が聞かれた。英国紅茶の世界は、その世界で完結しており、中国や台湾の紅茶を受け付けられない方を何人も見てきたので、正直ちょっと驚いた。そして何より素晴らしいのは、生産者と消費者が直接対話し、理解を深めていることだ。生産者の思いと消費者のニーズを交換していくことで、よりよいお茶が生まれる可能性が秘められる。また同時に生産者同士の交流、日本茶と紅茶の相互交流が行われることにより、お茶の世界が広がっていくのが感じられ、大変意味があるように思われた。

エコ茶会は既に10回目の開催となっており、年々規模が拡大、今年は2日間2000名を越える来場者があったというから、今や東京における中国茶・台湾茶の一大イベントとなっている。この会は、本当に中国茶、台湾茶が好きな人達が集まって、自分たちのやりたいことをやるう、知りたいことを知ろう、という集いだ。数々の茶席、セミナー、そして茶販売のブース、年に一度、お茶関係者が総出で行うお祭りの様相を呈している。筆者も4回ほどセミナー講師を務めさせて頂いたが、参加者は非常に熱心でとても気は抜けない。

エコ茶会の1日目は午後開始であり、午前中シングルオリジンにやってきた紅茶好きが、そのまま下の階へ降りて来て、紅茶以外の緑茶、烏龍茶、プーアル茶などを試飲していた。中には普段はインドやスリランカの紅茶しか飲まない人もおり、『世の中にこんなに沢山の種類のお茶があることを初めて知った』との感想を語る来場者もあつた。エコ茶会には、中国茶、台湾茶以外に、日本茶のブースも設けられ、静岡からは生産者本人が出席直接話を聞き、新しい日本茶を発見する機会となっている。



エコ茶会の会場風景

また日本茶関係者の中には『例え日本茶でなくても、こんなに沢山の人が若いが楽しんでお茶を飲んでくれている、その光景を見ているだけで、茶業の将来に希望が持てた』と語る人もいて、とても印象的だった。現在日本のお茶屋さんで見掛けるのは年配の方ばかり、しかも常連さん

は少しずつ減ってきている実情からすれば、確かにその通りだ。中国茶やインド紅茶と日本の煎茶、その一番の違いは『香り』ではないか、とこの2つの会を通じて感じた。煎茶はいつから香りが無くなったのだろうか。多くの来場者から『台湾の高山茶は香りが良い』とか『ダージリンの香りが好き』という言葉が出ていた。子供の頃、お茶屋さんといえはほうじ茶の香ばしさを思い出すのは筆者だけではあるまい。生産者と消費者の距離が、最近少し離れてしまっているのでは、と言わざるを得ない。

実はお茶全体にはかなりの潜在的なニーズがある、といえるのではないか。問題はそのニーズを的確に把握して、商品に反映させ、消費者に伝え、飲んでもらうことであろう。その為にも、より多くの生産者が直接消費者のニーズを聞く場に出してくれることを望んで止まない。

すが つとむ